『くれの廿八日』と社会小説論の季節

――内田魯庵伝ノート（十）――

野村　喬

前々回、わたしは、明治二十八年に魯庵が私生活において義母白井ミナと、文筆家として民友社と、それぞれの別れをおこなったことを記した。[1] その翌年、魯庵が芭蕉研究を文筆家として展開したことについては前回で論じた。[2] では、その間の私生活では何が生じていたか。小説『くれの廿八日』に先立って、そこから述べる必要があるだろう。

数えて二十九歳の魯庵は、かなり追い詰められていた、もしくは焦っていた。布施敬子との結婚生活が何時になったら始められるか、という問題だった。魯庵が二十七年十月三十一日の日記にわざわざ英語で「Consulting about his sister, we decided to open the secret to his mother.」と記してから、もう一年以上経過していた。

こうなった最大の理由は、彼が義母を離別し、離別に必要な手切れ金を作るのに高利貸しから借金したことにあった。そもそも、二十八年十一月十一日の日記に「余が一家の養母一人の不偕の為め、平安を破られ、且将来作るべき健全なる家風の累をなすは今に於て深く戒心せざる可からず」と離別を決意したのも、彼が敬子と作る家庭に暗い影を投げるような姑を持つのを避けたいからだが、親戚一統が離別に賛成しながら、誰も手切れ金を貸すことに協力しなかった（青木恭の一家はいくらか手助けしたらしいが、魯庵が約束した借金の利子を払うのが遅れた時

には、遠慮なく催促している）ために、高利の借金をせざるを得なかった。もとより、文筆家としては同年代の青年よりも早くから世の波に揉まれたとはいえ、社会人として経済生活の裏を知っていた筈のない魯庵だった。と言うより、世間普通の人は高利貸しの怖るべき実体について認識はなかったろうし、魯庵も無知だった。約束の返済を故意に受け付けようとせず、留守にして利がかさむのを待つようなやり方で、どんどん膨張する高利が、魯庵を追い詰めた。二十八年末に五十円借りた金は、翌年半ばには百四十五円に嵩んでいたのである。

借金しても、約定にしたがって期日期日に返済して行くならば、およそ半年で清算出来て、ものの見事に新しく家庭生活がスタート出来るという思惑が外れてしまった。なにしろ、布施敬子は女子学院を二十九年六月に卒業することから、その秋には新家庭が築けるものと魯庵は計算していたらしい。日記を読んでいると、魯庵は絶えず布施謙太郎の家を訪ねる。敬子は女子学院の寄宿舎に居るが、学校の休暇の間や日曜日などは兄の家に来て泊まる。二十八年十二月末、義母の居なくなった家に横山源之助の世話した杉山という書生を置いた生活が始まっていたのだが、その家に敬子が朝から、あるいは午後から来て、夜になって帰る。魯庵は敬子に小遣い銭を定期的に渡している。敬子も魯庵の着物を仕立てたりしている。時には（二十九年二月二十二日の日記、十月四日の日記などに見えている）敬子は魯庵の家に泊まっている。

二十九年一月十四日、読売新聞の記者をしている関巌次郎が来て、関が三宅花圃を訪れたところ、彼女が「内田さんは結婚なすつたさうですネ」と言った話が出ている。関は否と答えたらしいが、花圃がまだ田辺姓で三宅雪嶺と結婚する前には、魯庵が彼女に書籍を贈ったり、手紙を書いたりして、熱を上げていたふしがあった。[3] おそらく花圃は、敬子のことを誰かに聞いたのだろう。彼女が魯庵のことを気にしていたとは考えられることだった。ちなみに、この関巌次郎記者は筆名を如来と号して奇人として有名な人物で、その娘に音楽家の関鑑子、さらには筆者の友人の関弘子（観世寿夫の夫人）がいる。同じく一月十九日の日記には、魯庵の大学予備門当時の友人の石氏か

ら「あなたは御家族がお殖へなすつたさうで」と言われ、「とんだ事かな。そんな事があるもんですか」と書いている。二十九年十二月十日の日記に「此日、河野より婚姻の賀状来る。笑ふべし。世には詰らぬ吹聴をして喜ぶものある哉」と書いている。それほどに、魯庵と敬子との交際は、布施謙太郎兄弟、布施の母親から認められているのみか、魯庵の友人たち、二葉亭四迷、横山源之助、斎藤緑雨、松原岩五郎、戸川残花から中村花瘦、原抱一庵まで魯庵の家を始終訪れる者には知れ渡っていた。二十九年十月十五日の記事を見ると「中村（花瘦らしい―引用者）咄に、余が敬子に於ける関係は柳浪も知れり」と書いている。

ここで、それでは魯庵と敬子との間柄がどの程度に進んでいたか、という疑問には正確なことは言えない。日記で見る限り、魯庵は敬子以外の女性に、たとえば遊廓とか花柳界などを含めて一切接していない。僅かに二十七年十月二十二日の日記に「此日、一罪を犯す」と告白しているだけだ。それも何のことか判らない。たとえ、魯庵の家に泊まらなくとも、夜遅くまで魯庵のもとに居る敬子に、婚約者として魯庵がプラトニックでいただけだろうか。それは読者の想像にまかせる以外にない。確かに当時にあっては、男子が二十歳代半ばを過ぎて独身でいるのは珍しいだろう。女性にしても布施敬子が女子学院を卒業すれば数えで二十二歳。多くは十七、八歳で嫁いでいることから見れば婚期が遅れていたことになる。

しかし、魯庵の友人たち、中でも大学予備門で知り合った人々の多くが、二十八年七月に大学を卒業した。彼等は卒業して多くは官途に就き、あるいは大会社に勤めたが、そのほとんどが就職の直後に家庭を持つのだった。無二の親友だった布施謙太郎も税関に就職が決まると、たちまち横浜税関庶務課長山口圭三の娘で明治女学校を卒業した女性との縁談が降って湧いた。その弟の謙次郎も神学校を出て、母親の住む町の静岡教会に配属になると、ほとんど同時に養子婿の話が生じた。謙次郎はそれに応じて翌年一月十八日に結婚し、山家姓を名乗った。文学青年の魯庵と正反対のスポーツマンの布施謙太郎は、勇敢に女性と恋愛する豪快な青年だったらしい。もともと、現在

は断片になっている二十八年二月五日の日記には、謙太郎と中原貞子という大阪の女性との恋愛が記録されていた。三月二十日の記事によると、二人が知り合ったのは二十六年中のことだったらしいが、魯庵が予測したように、この恋愛は結局失敗に終わったらしい。しかし、縁談の起きた時、謙太郎は吉原で知り合った西村某という女性と深い仲になって、山口の娘を振り向こうともしなかった。二十九年初夏になって、山家謙次郎が東京に戻り、その母も謙太郎の不行跡を心配して上京したが、彼は西村と同棲に等しい状態にあり、怒った母は彼を勘当し、魯庵も止むなく絶交したが、十一月十一日には謙太郎と西村とが別れることになったと記している。生涯に何度となく魯庵は謙太郎と絶交と復交を繰り返しているが、やがて友情を復活できる期待を持っているらしいことも判る。

布施謙太郎の一條は、同じ年頃の青年たちが女性問題での愛欲とか苦悩とかを象徴するものだった。現に、やはり二葉亭や魯庵の許に絶えずあらわれる横山源之助にしても、独身で結婚を強く願望していた。二十八年八月十日の日記に魯庵が書いているところによると、「朝、横山源之助来。松原は家を持つて女房を持つたさうです。私も持ちたい。松原が持つなら私にも持てる。長谷川君に話したら一と口に言消されて困つて了ふ。――私はまだ女の経験がありません。岩崎文次郎でさへ色女を沢山こしらへるのに、私はまだ女を知らない。シカモ岩崎は向ふから惚れられるんですが、岩崎にさへ惚れるなら、私にだつて惚れ升。唯之を獲得する力が無いだけですと横山大にヤツキとなる」という話であり、翌年の一月十二日の日記に、魯庵の許へ来た横山に「夜おそくなりて酒をのます。大にラヴ懺悔をなす」とあるから、この間に彼にも一つの青春ドラマが生じたと知れる。

とにかく、魯庵の明治二十八、九年の日記を眺めていると、実にひっきりなしに、恋愛と結婚と離婚、男女関係や町で出会った女性の記事が多い。明治二十七年の日記では、一月二十八日には風呂の帰途に趣味に合う美人を見たのを書き、二月一月に野口寧斎を訪問して、その妹を見て、業病の兄と天性の美人の対比を憐れんでいる。彼女が後に男三郎事件の主であることを考えれば、魯庵の予感も当たってた。二十八年一月十日に斎藤緑雨が訪れて、

上田萬年と遠山甲子の間柄を話したのを興味深く書き留めている。六月二十六日には町を通行中に十八、九の女性について日曜学校の教師だろうと記しているし、二十九年の記事では、二月十五日に二葉亭四迷が妻を離別したことを書いている。それどころか、二十七年らしい日記断片の八月二十七日の記事では、坪内逍遙と会って、彼から書生の奥泰資の不始末を聞かされ、延々と書いているし、同じ日に饗庭篁村が妻を離縁した経緯を丹念に記録している。一見、魯庵は記録魔で他人からの見聞をすべて書いているのかと錯覚するが、わたしは、やはり当時の魯庵がそれ程にも、男女間の関係について関心が深かったのだと思う。文学をやっていることも、その理由になるだろうが、彼の年齢として気になる問題だったと予想されるわけだ。

ちなみに、魯庵は後年になって明治二十七、八年の日記を整理して〔回想録資料〕としたのだが、二十七年一月から三月までを整理した後に、「父存生中、一家三人の生活にて毎月大抵十五六円乃至廿円を支給したる如し」「廿七年一月の末を見るに余一個の小づかひ総〆金壱円八十三銭六厘（内九十四銭二厘莨代）とあり、ちと少なすぎるやうなれども明証あり」と記述している。ところが、その年十月九日から十二月三十一日までの日記には「十月以降〆百五十七円六十八銭三厘」と記録している。この間に、父の正が死去し、その葬儀などで通常よりも出費が多かったわけだ。父の死後、魯庵の生活は、友人が西江戸川の家に屢々訪れたり、また敬子へ小遣いを与えたりして、以前よりも出費は増加しているのだが、もとより遊里へ行くこともなく、戸主となった面目を保とうとしてか、着物（二重廻し）などを新調してはいるものの、芝居も行かず、せいぜいが義太夫浄瑠璃が好きで寄席へ行くことぐらいしか、彼の贅沢は無かった。二十九年の日記に記された十月から十二月末までの毎日の出費を計算すると、十月が五十二円五十一銭一厘、十一月が五十三円五十五銭七厘、十二月が四十三円三十三銭八厘だが、十月に三十円を借金返済、十一月は十六円余を返済している。だから、平常では二十数円の生活費であることが判る。魯庵が明治二十三年二月に国民新聞に入社した時の月俸は二十五円だったが、この時期の魯庵の稿料等の収入は大体三十円

から四十円程度でなかったろうか。ちなみに、その頃の給料生活者の収入を見ると、小学校教員の初任給が八円、銀行員の初任給が三十五円、高等官の初任給が五十円だった。当時は官尊民卑丸出しであるが、現在では小学校も国家公務員上級職員も初任給は十二万円から十五万円に位置づけられている。魯庵の大学予備門の同級生たちは、ほぼ高等官になったわけだから、彼の収入はそれより低かったわけだ。物価は東京の標準米の小売価格が10kg当たりで、明治二十五年は六十七銭、昭和六十年では三千五百円だから、米価だけの比較では現在が五千倍ということになるが、牛肉や味噌醤油などを比較すると八千倍から一万倍にもなる。魯庵の好んだ寄席は八銭だったから芝居の入場料の最低料金が大体二十銭程度、歌舞伎座の最高料金が五円だったのに比較すると安かったが、現在も約二千倍ということになる。(4)

ついでに書いておこう。魯庵が寄席へ行くのは、義太夫の素浄瑠璃を聞きに行くので、竹本播磨太夫の「お夏清十郎」「吉田屋」「葛の葉子別れ」「揚巻助六両面鑑」などの演目が二十九年の日記に記されている。

上部に空欄がある罫線の入った和紙に毛筆で書かれた魯庵の日記を見ていると、意外にも几帳面に、上部の空欄に毎日の出費を記している。書籍を買うことと、時たまに料理屋と寄席へ行くこと以外は、小遣いとしては煙草銭だけが、唯一の魯庵の贅沢だったと知れる。そうした魯庵にとって、義母ミナ離別のために高利貸しから借金をした後始末は言語に絶したことだったに違いない。確実に布施敬子との世帯を持つ日を先に延ばすことになったからだ。

明治三十年になって、エミール・ゾラの「戦塵」などの翻訳をしながら、前年から準備をして来た評伝「芭蕉庵桃青」をまとめた。この仕事については前回に述べた。(5)

ことのついでに書いておけば、魯庵は主として翻訳で生活費と借金返済費用を稼いだに相違ないが、わたしが日記等で知る限り、魯庵は掲載場所が何処かは明確でないが、新聞雑誌に、文学以外の方面について、さまざまな記

事を自由に書くことがあった。その程度には、新聞各社につてを持っていた。決して多額の金を得たとは言えないが、自由操觚者の一人であった。だから、彼の著述年譜について、ほんとうに正確且つ完全が期し難いのは止むを得ない。むしろ、あれもこれも魯庵の仕事と、押しつけない方がいいだろう。斯くして明治三十年中に、ほぼ借金の清算がなし遂げられたと見ていい。

そこまで来た時、魯庵は、操觚者、翻訳家の空しさに気がつかないわけに行かなかったのではないだろうか。魯庵が小説「くれの廿八日」を明治三十年の歳末に書いた理由の最大なるものは、実は此処にあった筈だ。

晩年に、彼は「『暮の二十八日』其他」の回想記を書いた。[6] その中で〈どうして小説を書く気になった？『暮の二十八日』を発表した当時、能く人に訊かれたもんだが、ドウもコウも無い、燃えたわけではなくて、半苦学生生活を送つてゐた境遇上、牛乳を配つたり、新聞を配達したりすると同じ心持で、雑誌の寄稿をしたに外ならんので、小説に指を染めたのも同じ動機、喰ふ為めであつたのである〉〈そこで小説には愈々自信は無いが、喰ふ為めの小説を書く気になつてゐた処へ、折よくか悪くか、島村君から坪内君を通じて、「新著月刊」への寄稿を交渉されて来たので、先方の要求は矢張り批評か雑感であつたが、ソンナものより小説を書かうと返事して、約束が成立して早速筆を操つたのが『暮の二十八日』である〉〈今言つた通り、纏つた金を取るには、小説を書くより外に道がなかつたので決心した創作であるから、相談のあつたのが十二月の初めで、差向き暮の支度に、早速書かなければならなかつた。腹案も何もあつたもんぢゃない。立案なんぞしてゐられない。（中略）私は最後に題名を附けるのがその頃からの例で、二十八日に脱稿したから『暮の二十八日』と命題して「暮の二十八日だといふに……」云々の冒頭を数行加へた〉と述べた。

この回想がすべて信用出来るかと言えば、なにしろ三十年も経た後に書かれたものだから、題名でさえ誤記している程で、半苦学生生活は明治二十年代はじめならともかく、既に書生まで置いて、常時呼びつけの俥を持ってい

る当時の魯庵には相応しくない。回想の冒頭に〈此の作の発表された「新著月刊」からして手許にない。参考したいものは何も無いし、（中略）ウロ覚えの記憶を辿って、憶出し〳〵しつゝ、秩序も何も無しに書く〉とまえがきされているのが、たとえ本当だとしても、わたしは太平洋戦争後の内田家を訪問した時には、『新著月刊』もあったし、「くれの廿八日」の自筆原稿も保存してあった。

だから、『創作苦心談』で〈あれは暮の二十八日に脱稿したから、『暮の二十八日』と命じたので、其後一ト月ほど手許に置いて字句の修正及び増減をしましたが、初めての創作ですから随分まごつきました〉[7]とある方が真実であり、雑誌『新著月刊』に発表の際には、末尾に〈三十一年二月十九日脱稿〉とあるのが正確だった。しかし、二度も〝暮の二十八日に脱稿〟と書いたのも真実だったと考えられる。なぜなら、〈処が弱つた。大骨折でやつとこさと書き上げた原稿を、二十八日の朝発行書肆へ使に持たしてやると二十五日で会計を締切りましたからと仕払をことはられた。然ういふ事が無いとも限らんと思つて、前以つて一週間も前に、島村に念を押して置いたのだから、不都合極まるし、坪内君を通じて島村に掛合ひ、（中略）やつとこさ請取ることが出来た〉という〈丁度暮に際して其時のマゴツキが憶ひ出される〉[8]ためだったのではないか。たぶん、この三十年末に漸く高利貸しの借金をすべて返済完了するため、もしくは完了したため、正月を迎える資金に、最初の小説から稿料を得ることが絶対に欠くべからざる条件だったのに相違ない。こういう何十年を経ても忘れられない出来事は誰の身にもあるものだ。[9]

それならば、魯庵は、「くれの廿八日」を生活費の必要からのみ執筆したのだろうか。たしかに、魯庵は文芸時評をやるよりも翻訳をする方が稿料が良いから翻訳に転じたのだし、翻訳よりも稿料の高い小説創作を選んだとは言える。だが、歳末に際して咄嗟に小説を書く気になったのではなかったと、断言出来る。魯庵が晩年に回想した通り、坪内逍遙が魯庵を『新著月刊』の編輯主幹をやっている愛弟子の島村抱月に紹介したのは、東京専門学校に就職したいという魯庵の希望を叶える代わりであった。生活維持のために稿料をたくさん取れる場所として、それ

は用意された。だから、批評や雑感よりも創作ということになるだろうか。

魯庵が三十年に評伝「芭蕉庵桃青」を執筆したのは、もとより若い時から正風俳諧についての人並み以上の読書研究があったからだが、二十八年から二十九年にかけての日記を見ていると、改めて大野洒竹その他から俳書を求めて準備していることに気付く。それと同じように、魯庵は「くれの廿八日」のための準備をしていた。二十九年三月九日の日記に「毎日新聞に知十を訪ひ、吉佐移民会社の所在地を問ふて後、会社に末広一雄を訪ふ。五六年振なり、閑談凡そ一時間にして別る」とある。移民会社に友人を数年ぶりに訪問するのは、単に久闊を叙するためだけだったとは思えない。

やがて、その年の八月末から国民新聞に長風生の署名で連載の巻頭論文「海外移民」が発表され、その延長上に「日本よりメキシコの観察」が翌三十年三月十九日に掲載された。長風生の論文の中心部分を抜き出すと、

〈メキシコ探検者は、数回彼地に渡り、彼当局者の親切なる幫助によりて、探検の目的を達し、同国の寛大なる行政者と、富饒なる土地と、他日通商上の関係より生ずべき利益とは、日本人民の移住すべき最良の地なることを査定し帰れり。此等探検者の報告書によれば、墨国に於いては従来白人殖民の盛なるのみならず、白人の殖民会社は世界に比類なき自治的行為により成立し。其利益の莫大なることを以てせり、且つや農商務殖民大臣マニイル、フェルナンデス、レアル氏が、切りに日本人民移殖を希望せる一片の好意は遂にチアパス州、ツコヌマ郡、エスリキンドラ十一万余町の殖民地を得べきことを以てせり、吾人は彼等探検者の如くに、果して能く日本人民移殖の効果あるや否やを即断し能はずと雖も、日本が太平洋を横ぎりて太西洋に及ぶ平和政策の第一根拠地として、メキシコ国は前途甚だ有望なりと信ずるが故、敢てメキシコ問題の講究を促かす所以なり。〉

と述べられていた。そこには、また、探検者の報告をもととした詳細なメキシコの実状が紹介されていた。

明治二十年代の前半に、郵便報知新聞や国民新聞や日本などの各新聞紙上に展開され、矢野龍渓・徳富蘇峰・三

宅雪嶺らが熱心に説いて盛んであった南進論は、現実的に世界の殖民問題上で日清戦争後に徐々に変化の兆しを見せていた。たとえば、アメリカ西海岸地方では黄禍論がまきおこり、ハワイの日本人移民の増加にともなう排斥論が生じつつあった。二十九年の各新聞はそうした事情について、相当突っ込んだ報道を行っていた。その理由としては、明治維新後の貧民問題の解決の一手段として夥しい同胞の海外流出があったためと思われる。むろん。ヨーロッパ各国の植民問題が国家の対外膨張政策にほかならず、帝国主義的収奪の問題と重なった点、漸く資本主義の源蓄段階を経過しつつあった日本にしても無関係ではあり得ないとは考えられる。だが、近代産業発達が遅れた日本にあって、実際に移住した同胞から、移民実現のため探検調査から交渉までおこなった当事者たちまでは、決して植民問題を帝国主義政策の加担者として考えていたのではない。言わば、植民問題は貧民問題の一環としてとらえる必要があった。明治二十九年にアメリカから帰国した片山潜が彼の地の労働組合や社会主義論を紹介していたこととも無縁ではなかった。既に、日清戦争前から東京の江東地帯の貧民街を調査していた横山源之助や松原二十三階堂、二葉亭四迷らは悉く魯庵の親友たちだったし、その点で、魯庵が貧民題問に関心を持ち、同時に植民題問にも注意を払っていたと、容易に推測が可能だった。ちなみに長風生とは菊地長風のことで、松原二十三階堂の友人であり、魯庵も松原から紹介されていて、〝民友社中の非民友社〟と呼んでいた。

こうしたメキシコ植民題問についての知識を吸収していた魯庵が、その材料を使用して描く仕事として創作活動を想ったと、わたしは考えている。[10]

小説「くれの廿八日」で描かれたのは、――金満家の家付き娘の入り婿となった主人公の有川純之助が一ヶ月前に妻のお吉と夫婦喧嘩をして以来、二階の一室に籠もり、妻は離れ座敷を締め切って、顔も合わせない有様で、媒酌人の高橋善兵衛が朝晩に出入りすることが続いて、純之助が昨日は媒酌人と半日相談した後で何処かへ出掛け、夜遅く普段は飲まない酒を飲んで帰宅したその翌日の、歳末も押し詰まった二十八日、ミッションスクールの教師

をしている中条静江が純之助を訪問するところから始まって、メキシコ経綸の夢を実現するため同志を糾合し、メキシコ移民計画に資金を調達することを結婚条件にした純之助が、それを承知しないばかりか、幼馴染みの静江との交際まで嫉妬したお吉のために、静江に諭されて彼女とのプラトニック・ラヴを諦め、メキシコ植民計画一切を断念して、元旦を迎えるまでであった。

作品を虚心に読めば、純之助が〝功名心〟と〝愛〟の矛盾に気付かず、それを両立させようとして失敗する物語、あるいは両者を秤にかけて自己の責任を回避しようとした純之助のエゴイズムを描き出した作品であることが、容易に読み取れよう。

クリスチャンの静江の来訪にヒステリー気味に頭痛となったお吉を宥めて大磯に行こうとして撥ねつけられた純之助は静江と暮の上野公園を散策するが、結婚を勧めても静江が独身でいる理由を実は十余年来交際して自分を愛しているためかと想像していた純之助に対して、静江は言葉鋭く、〈凡そ貴郎の様な人、道を説く人が現在の妻を功名心の犠牲にするなんて――だから嫌ひですワ〉と突き放す。静江の批判は、〈或人は功名心のために愛を棄てる。或人は功名心を托けに愛を棄てる。けれども如斯な人達は大抵自分の良心に責められたり、或は無邪気に軽薄を吹聴して自分の価値の下がるのに気が附かないもんですが、貴郎は其上手を行つて、功名心の為に愛を喪くして置いて、猶だ足りないで夫人の瑕瑾を数立てゝ、愛を喪くした原因を夫人の罪に托けてお了ひなさる。其上に御自分の責任を棚へ上げて夫人の瑕瑾を冷淡に手厳しく批評してゐらッしやる〉ということにある。

夫人を愛しなさいと言う静江は、彼女に過去の幸福を訴える純之助に対し、「悉皆神様の摂理ですワ」と声を曇らす。彼は「貴嬢も不幸だ。貴嬢の愛が喪くなッたといふ言葉は能うく僕の心根に徹した。僕の愛が消えて了つたといふのも貴嬢の情に徹しましたらう。二人とも誰一人掣肘する者の無い自由の身で、思ふ事が自由にならなかッたのは之が即ち運命といふンでせう」と語って、二人はさびしく別れる。

この際の〝愛〟とは、純之助にとっては静江一人に対するものであったが、静江は彼のお吉への夫としての愛を意味していることは明らかで、お吉の面倒を見て行くことを約した純之助は、その夜、同志たちの面前で「私は一家の事情の為め余儀なく一時墨西哥渡航を中止します」と詫びた。同志たちは純之助に有りとあらゆる罵声を浴びせた。しかし、純之助は沈思黙考して〈自分の経綸は他の政略的殖民若くは貨殖的移民と全く違ひて、本と道徳の理想に根基したるものゆゑ〉〈自分は飽くまでも聖賢の訓に従って真人の道を行く社会的事業だと信じてゐた。然るに敬虔の信仰に富める静江すら雄大是れ喜ぶ尋常の野心だと云つた。況してや無智文盲のお吉が全く理解し得ないは本と当然で〉あると悟る。彼がそう悟れば、有川家には一先ず平和が戻って来る。静江は年末に関西へ旅行し、有川邸には、メキシコ渡航の同志たちまで訪れて、酒をくらい酔っていた。

その限りで、「くれの廿八日」は一先ず完了している。だが、雑誌掲載の際、末尾に作者は（本篇は腹案なる長編の発端とも見るべきものなれば文技の拙なきに加へて作者が感情徹せざる処多かるべし読者諒焉）と添えられていたのである。

にもかかわらず、「くれの廿八日」は、当時喧しく期待されていた〝光明小説〟〝家庭小説〟の評価を得て評判になった。たとえば、「其基督教の炎々たる信仰を活現するに於て、和気藹々たる家庭の描出を帰結と為すに於て、余輩は十分に宗教小説と家庭小説との萌芽を看取し得たれば也」（『帝国文学』31・3）とか、「本篇視るべきは、恋愛の真実なる意義、正義高潔なる人道、功名と恋愛との情戦、此等の消息に作意を取り理想を着けたるに在り」（角田浩々歌客『国民之友』31・4）とかの評が良く物語っている。実際にも当時の評自体は素直に作品の姿を有りのままに見ていた、と考えられる。

さて、前記の「『暮の二十八日』其他」の回想で、魯庵は〈『暮の二十八日』が発行された時、私の周囲のものは、私自身の事を書いたと云つて私を冷かした。処が発行後二週間ばかりして、長谷川二葉亭を訪ふと、座に就くや否

や、「到頭生捕られたネ」といふ。何の事か解らぬので問返すと、『暮の二十八日』は長谷川の家庭を書いたのだと独りぎめしてゐて、「イヽサ、小説に生捕られるのは関はんがネ、あれぢやア書き足りてゐない、モ一度後談を書き玉へ。材料は生捕られるツモリで提供しやう」と独り呑込んで了つて、「さうぢやア無い」と弁明しても、「イヽサ、そんな事を怒りやアしない」と丸で耳を傾けやうともしなかつた〉〈一方には私自身の事を書いたのだと憶測するものがある傍ら、一方には本人自身から生捕られたとモデルを買つて出るものがある。だが、作者に言はせれば、ドチラでも無いので、モデル問題なんてものは大抵そんなものだ〉と述べている。

前述したように魯庵は、饗庭篁村の離婚も知っていれば、二葉亭四迷の離縁の経緯も聞いていた。そのなかで、二葉亭の場合は自分で名乗るだけあって、無理からぬ小説との共通性があった。二葉亭の最初の妻の福井つねは、玄人あがりであった。二葉亭の奥野広記宛書簡（明24・12・31）に「財嚢之都合にてお常之宅に杉野と共に同居致候にて有之候」と見られるような理由で結ばれた夫婦だった。魯庵も「夫婦の間が始終折合はないで、沈黙の衝突が度々繰返された。其間の紛糾んだ事情は余り深く立入る必要は無いが、左に右く夫妻の身分教養が著るしく懸絶して、互に相理解し相融合するには余りに距離があり過ぎたのが原因であった」と後に書いている。[11] 他方で、二葉亭の友人の杉野鋒太郎の妹のちかは、二葉亭が福井つねと同棲する以前から相識の仲だったが、つねとの離婚紛争中と推定出来る坪内逍遙宛の書簡で二葉亭は「ちかの一件は今なかなか結婚なとの事をおもう余地なく候つねハ後妻を迎ふるものなら彼人をと申候へと肝腎の小生が其気になれ不申候」（月日不明）と書いている。この杉野ちかは生涯独身で過ごした点、有川純之助・お吉・静江の関係と相似の部分があった。二葉亭が「生捕られた」と言うのも尤もだ。

他方、〈私の周囲のものは、私自身の事を書いたと云つて私を冷かした〉ような魯庵の生活があった。この周囲というのは宮田脩や布施謙太郎だったろうが、小説に描かれた純之助は魯庵その人であり、お吉の風貌・性行が離

別した義母白井ミナであり、友人の妹静江が布施敬子であると見たからであったに相違ない。[12]

ただ、魯庵がモデル問題を拒否しようとした点が、むしろ評価されていい。彼自身のことを描いたと言う周囲として、まだ結婚してもいない布施敬子を静江と同じく愛を思い切る女性にするのも当を得ないことだし、まして義母を金満家の家付き娘に仮託するのも相似関係とは言えないからだ。従って、ミナや敬子の性行を写した点はあっても「くれの廿八日」の人物関係には明白にフィクションが成立している。ただ、人物描写をするに当たって、作者の血肉を通過していたと考えるべきだった。ここまで書くと、賢明なる読者は慧眼良く理解いただけようが、魯庵の明治二十七年から二十九年までの日記に浮かび上がる、彼と彼の周囲の人間ドラマ、青春のドラマが深く影を落としていることに気付く筈だ。結婚とか家庭とかの陥穽が描かれ、しかも避けられない人間喜劇が見られるのだ。

換言すれば、こうした小説方法こそは、二葉亭四迷の「浮雲」や森鷗外の「舞姫」、あるいは尾崎紅葉の「多情多恨」が追求した近代小説の正統的な方法を継承したものであった。

しかるに、第二次大戦後になって、こうした「くれの廿八日」の評価が小田切秀雄や猪野謙二ら所謂左翼文学史家から、明治初年の政治小説の系譜と昭和初年の無産階級文学乃至プロレタリア文学の系譜を媒介するもの、日露戦争前後の木下尚江や白柳秀湖らの社会小説あるいは社会主義小説への傾向文学の先駆と読み取ろうとする風潮が作り出された。たとえば、猪野謙二は「くれの廿八日」の有川純之助が「猟官だの、買収だの、政綱だの、マニフエストだの外資輸入だの増税だの軍備緊粛だのと騒立てるが、トドの結局は弗箱一杯の金子を貯めて色の全白い奴を四五人も飼殺しにしたいばかりの国利民福論」と政治家・実業家を罵倒する言に釣られて〈現実の日本の政治社会に対する批判は、その後「政治小説を作るべき好時機」（明治三五、九）という魯庵の論文等において、より自覚的に打出され、「落紅」「霜くづれ」「片うづら」「血桜」「電影」「破垣」「社会百面相」等彼の社会小説を一貫するテーマとなる〉と書いた。[13]

なんとかして、登場人物の片言隻語から反政府的言動を取り出し、小説作品を手前勝手な系譜の中に押し込めるのに躍起になった姿勢が見てとれるわけだが、もはや斯る非常識が通用する筈はないと思っていたが、現実には未だにこうした曲学者におもねる研究者もないわけではない。[14] 誤読どころか、研究者の資格がないと評すべきだろう。百歩をゆずって誤読したとすれば、明治二十九年に俄に議論が起きた社会小説論議の波動のなかに、無理矢理に「くれの廿八日」を位置づけようとしたことにあった。

いったい、社会小説の用語は早く坪内逍遙も『小説神髄』において使用したし、魯庵も『小説一斑』において使用したが、それらは悉く小説が現代社会の姿を反映すべきことを説いたものであって、逍遙にあっては世態風俗というのと変わることはなかったし、魯庵においても「最も進歩したる詩は人間の運命を示し社会と人性の関係を明らかにするものなり」との理想への階梯にほかならなかった。それが、『国民之友』（明誌29・10）上の「社会小説出版予告」を発端に、帝国文学記者の「社会小説」（『帝国文学』明29・10）「政治と文学」（同、明29・11）の二つにおける反対論、野口寧斎の「民友社の社会小説」（『太陽』明29・12）による期待論、早稲田文学記者の「社会小説」（『早稲田文学』明30・2）による分類論、島村抱月の「社会小説論」（『新著月刊』明30・4）における肯定と批判、高山樗牛の「所謂る社会小説を論ず」（『太陽』明に30・7）おける排斥論と、かまびすしく論じられ、慌ただしい社会小説論の季節が訪れていた。

この論議の展開を調べて見れば明らかだが、民友社が掲げた社会小説アドバルーンは当然ながらも、徳富蘇峰も承知の上であったから、一種の国家主義的風潮として出て来たものだった。決して社会主義的要素は無かったので、既に悲惨小説・深刻小説・観念小説から光明小説・宗教小説・家庭小説等の用語で評価されていた樋口一葉・川上眉山・泉鏡花らの作品を挺子に進めようとした花柳小説克服の狼煙だった。それが急速に批評の対象になるのは、私見では島村抱月と高山樗牛が議論に加わった時からであろう。

そうして見れば、「くれの廿八日」が発表された時点では、真に社会小説論は熟していなかったことになる。実際、抱月も樗牛も魯庵の作品を議論のなかに例としてさえ用いていない。それは当然だった。現に、魯庵が「くれの廿八日」に先立ち掲載したゾラの翻訳「戦塵」の解説として付した「ゾラ『戦塵』の後に書す」（『文藝倶楽部』明30・2）において魯庵は、次のように記した。

〈所謂実際派なるものは盲目理想に迷溺する徒輩の考ふるが如く漫りに社会現象を写真的に描写するに非ずして謬妄なる宇宙観或は人生観を基として架空の人物を作為し若くは奇巧の説話を構ゆるに反して科学的に人世を研究して道徳或は宗教の断見を棄てゝ以て忌憚なく自然其儘に描写するを云ふ。科学の研究は必ずしも人の理想に満足を与へざるを以て時としては其研究の報告に不快の感を抱かしむる事あるも又已むを得ざるなり〉と。

これが全く自然主義の提唱と言って差支えはないだろう。この魯庵の見解は、ゾラの主張を敷衍したところが強かった。したがって、これまで魯庵と対立または論争することが無かった森鷗外は、ゾライズムを排斥することによって文壇に登場しただけに、忽ち非難の矢を浴びせかける。『めさまし草』の「雲中語」（明30・3）で〈先生の仰やる醇雅の作とやらが却て格別で、不道徳にして猥褻な小説がゾラの作の大部をなして居るのではありますまいか〉と斜にかまえた評で黙殺されてしまった。つまり科学的な自然描写は猥褻な描写肯定につながるとの論法だったわけである。面白いことに、魯庵の方も鷗外の胸三寸の中身は良く承知していただろうから、「雲中語」に対しては一言も反論しない。完全に両者相互の黙殺がおこなわれた。

「くれの廿八日」を書いた秋、魯庵は「政治小説を作れよ」（『大日本』明31・9）を発表した。後に『文藝小品』に収録の際の改題「政治小説を作るべき好時機」で現在は知られる一文である。彼は〈小説家よ。卿等が恋愛世界に注ぐ観察を一転して政治界近日の大変革を見よ。十数年前流行せし所謂政治小説の蜃気楼的架空譚今や悉く実現せられて〉〈聰明なる読書家は屢々政治小説を小説の極致なる如く思惟して渇望す。政治小説の価値は姑らく

置き、今日政治界の情勢日に益々滑稽なるを見て転た政治小説を作為すべき最好機なるやを思ふ〉と述べ、かつての小ディズレーリが新進大臣であり新進勅任官であることを確認する。〈今より十三四年前政治小説なるもの盛んに出でたり。文部大臣尾崎行雄君の『新日本』、農商務次官柴四郎君の『佳人之奇遇』、特命全権公使矢野文雄君の『浮城物語』、亡末広重恭君の『雲中梅』等其尤なるものにして当時既に嘖々せられしが其名声の高きに比して其理想の狭隘且つ浅膚なるを疑ひしものも亦少からざりき。されど今にして思ふ。身政治界に在りて其内情に熟するが故に殊更に狭隘且つ浅膚なる脚色を立案せられしに非ずや〉と、明治二十三年当時に島田三郎や矢野龍渓らと論争した当時の情熱を思い浮かべながら、揶揄的に政治小説家たちが政治家として成功していることを記す。それは逆に、かつての政治小説が決して真に政界の真実を伝えていなかったことを、改めて確認したことになる。実用の文学を唱道した人々はまさしく実用化していたのだ。

〈此故に我は政治小説を作らんとする者に注意す。先づ大政治家君の政治小説を読んで略ぼ政治家特有の理想や希望や趣味やを精かにして後…（中略）…文壇功名を成すべきは唯だ憲政党頌徳的の政治小説あるのみ。政治小説なる哉、政治小説なる哉、必ず成効を保証すべきは政治小説なる哉。…（中略）…我は此点に於て小説家諸子が栄達の手段として政治小説に手を着くべきを切に勧告す。…（中略）…小説家よ、此好機を利して先づ憲政党に加入し、憲政党員の名を以て大々的政治小説を作れよ〉と結論した。

この魯庵の一文に対する反応を顕著に示したのは、実に高山樗牛であった。彼は魯庵論の「評家及び作家としての不知庵」（『太陽』明32・6）において絶賛する。魯庵の文章の天下国家を直撃した論法を賞賛した後に、ただ創作の面での不満を、〈今批評家たる不知庵より、転じて著作家たる不知庵を見れば、子の近業は必ずしも如上の豊富を実現せりと曰ふを得ざれども、兎に角時代の精神を捉へて是を体現し、解釈せむと力めたるの形跡あるは、吾人の多とする所也〉といくらか言及していた。だが、樗牛もまた誤読してしまった。なぜなら樗牛は、民友社的社

会小説論がややもすれば反国家体制的であることを警戒して排斥しながらも、魯庵の文章が国家的見地から書かれたものと読んだためだ。その上、彼は自身の〝時代精神論〟と共通する論者を待望していたから、魯庵の一文が自分の意識と通底すると誤認したのであった。

しかし、誤読は今日までも続いていた。前記の猪野謙二の文章が裏書きしている。彼は当時の社会小説論を腑分けして金子筑水（早稲田文学記者）と高山樗牛（太陽編輯主幹）とを論議の両極と眺め、〈魯庵の社会小説についていえば、それはこのいわば左翼からと右翼からとの二つの社会小説論の対抗関係の中からこそ生れたということができるであろう。「くれの廿八日」で扱われている植民の問題が、客観的には、当時の新興ブルジョアの海外発展と連るものであったということも注目すべきであるが、なお彼が樗牛の支持をかち得るとともに一方では片山潜の「労働世界」にも寄稿を捉されているという事情が、その生涯を通して見出されるラディカルと保守的との深刻な矛盾をも含めて、何よりもよくこれを物語っているといえよう〉と言う。これは残念ながら猪野のきわめて公式的左翼の言辞を生々しく語ったとしか評するほかなく、論者が如何に保守的そのものの研究者でありながら、申し訳に政治的に左翼ぶった身振りをしているかの証しであった。

正しい読み方は、後藤宙外の時評「小説界の新生面」（『新小説』明31・10）に示されていた。宙外は、〈魯庵氏の筆鋒は例の諷刺的冷嘲的なれば、正面より其の文に随うて其の意を窺ふは難し、然れども、吾人を以て付度すれば、氏が本趣意のある所は、現時政治界の状態が余りに醜陋にして、秩序の壊滅せる、到底真面目なる小説の主題となすに足らず、寧ろ滑稽小説の材料とするか、然らざれば、之れを籍りて一時の際物を作り、衆愚の嗜好に投じて、虚栄を僥倖するの二送あるのみと云ふものゝ如し〉と解した。

宙外の認識は正しいが、しかし実は、文字通りに読むならば、魯庵は憲政党批判の皮肉を書いたのであり、換言すれば、十数年前にさかのぼって政治小説が流行した時期の政界と類似した腐敗の極に達した政治社会を嘲弄する

目的で書かれた諷刺文だった。だいたい、魯庵が憲政党を賛美するわけもなく、政治小説を肯定するわけもないことは自明であった。したがって、いかなる意味でも「政治小説を作れよ」が社会小説を盛んにする目的で執筆されたなどということは無い。当年の論議から全く無縁の、あるいは寧ろ皮肉をもって一石を投じた揶揄であった、と考えるのが真の結論とすべきであった。[15]

ひるがえって、「くれの廿八日」は社会小説でなかったわけであり、魯庵が目的意識的に構築しようとした大長編小説の意図を秘めていたと考えるべきだった。しかしながら、続編は遂に書き継がれなかった。作者の能力が及ばなかったというのが真実だろうが、同時に有川純之助や中条静江の人間像を展開して行くべき条件が日本に未成熟であったことも慥かだった。そのために、魯庵その人が、折角、新進小説家として登場しながら、現代的材料を用いて解釈を提供するだけの小説を次々と発表するのに忙しくなってしまった感がある。その点、「浮雲」を中絶した二葉亭四迷の友人らしい、とも言えようか。

「くれの廿八日」を書いた魯庵は、その年七月十五日、晴れて婚姻届を小石川区役所に提出した。長い春は終って敬子との家庭生活が開始されたわけである。

〔注〕

（1）「父の死とその跡始末」（青山学院女子短大紀要　昭51・11）、「民友社との別れ」（青山学院女子短大紀要　昭53・11）
（2）「芭蕉・徂徠の伝記」（青山学院女子短大紀要　昭61・11）
（3）「民友社と不知庵」（青山学院女子短大紀要　昭43・11）
（4）週刊朝日編『値段の風俗史』正・続・続々・完結編（朝日新聞社刊　昭56・1～59・2）
（5）「芭蕉・徂徠の伝記」
（6）「『喜の二十八日』其他」（早稲田文学　大15・1）
（7）『創作苦心談』（新声社刊　明34・3）

（8）「『暮の二十八日』其他」

（9）拙稿「『くれの廿八日』の性格考」（角川書店刊『日本の近代文学』所収　昭53・11）

（10）同前

（11）同前

（12）同前

（13）「内田魯庵――くれの廿八日――」（猪野謙二『近代日本文学史研究』所収　昭29・1）

（14）石崎等「魯庵とその時代」（『文学』昭61・8）。念の為に書いておくが、この筆者は呆れたことに図表「明治三〇年前後の文学像の拡散」なるものを大真面目に掲載している。その当時の小説を、純文学・家庭小説・風俗小説・社会小説・蘆花「不如帰」の五種に分類している。こんなふうに、大正期の概念、昭和戦後の概念を当時の概念とごった煮にした分類を見るのは、筆者の初見だ。大学生でもこんな幼稚な間違いはしない。

（15）拙稿「近代文学史認識の留意点（下）」（『文学』昭39・9）